体育科学習指導案

日　時　令和７年 12 月 12 日(金)
　　第５校時 13：40～14：25
学校名
対　象　第６学年　組　名
会　場　２階　体育館
授業者

１　単元名

器械運動「跳び箱運動」

２　単元の目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
○　跳び箱運動の行い方を理解するとともに、自己の能力に適した切り返し系や回転系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったりすることができるようにする。	○　跳び箱運動についての自己の能力に適した課題の解決の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。	○　跳び箱運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

３　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①　跳び箱運動の行い方について言ったり、書いたりしている。 ②　自己の能力に適した切り返し系の基本的な技を安定して行ったり、発展技を行ったりすることができる。 ③　自己の能力に適した回転系の基本的な技を安定して行ったり、発展技を行ったりすることができる。	①　ＩＣＴ機器を活用するなどして、自己の課題を見付けている。 ②　自己に適した課題を設定し、解決のための活動や場を選んでいる。 ③　課題解決のために自己や仲間が考えたことを他者に伝えている。	①　跳び箱運動に積極的に取り組もうとしている。 ②　約束を守り、仲間と助け合って運動に取り組もうとしている。 ③　跳び箱運動の準備や片付けなどで、分担された役割を果たそうとしている。 ④　仲間の考えや取組を認めようとしている。 ⑤　場の安全に気を配っている。

４　指導観

(1)　単元観

本単元は、小学校学習指導要領(平成 29 年３月告示)第２章　第９節　体育　第５学年及び第６学年　B 器械運動

(1)　次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技を身に付けること。
　ウ　跳び箱運動では、切り返し系や回転系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったりすること。
(2)　自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。
(3)　運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすること。

を受けて設定した。また、小学校学習指導要領解説体育編(平成 29 年７月)の内容を踏まえ、本単元における運動の特性を以下のようにまとめた。

ア　一般的特性

＜機能的特性＞

- 回転や跳び乗りなど、非日常的な動きを味わうことができる運動である。
- 動きの高まりや技の習得に楽しさや喜びを味わうことができる運動である。

＜構造的特性＞

- ①助走、②踏切り、③第一空中局面、④着手、⑤第二空中局面、⑥着地の６局面構成の運動である。
- 動きが短時間の一連の流れで行われるため、児童にとって課題を把握しにくい運動である。

＜効果的特性＞
- 力強い踏切りや腕支持など、全身の連動した動きを高めることができる運動である。
- 柔軟性や筋力、調整力などの体力を高めることができる運動である。
- 切り返しや手で体を支持する感覚など、多様な身体感覚を養うことができる運動である。
- 自分の体のスピードコントロールや姿勢制御などを養うことができる運動である。
- 動画等で客観的に自分の動きを見るよさや必要感を感じることができる運動である。

イ　児童から見た特性
- 技の完成度が明確であり、できた時の達成感を味わいやすい運動である。
- 跳び箱からの落下や衝突に対して恐怖心を感じやすい運動である。
- 自分では技のできばえを把握できず、ＩＣＴ機器や他者の助言が必要な運動である。
- 仲間の動きを見たり助言したりすることで、協働的な学びのよさ感じやすい運動である。

(2) 児童観

ア　教師から見た実態

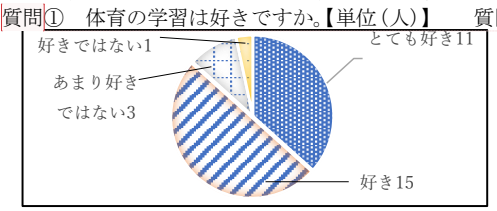
本学級の児童は、第６学年になってからこれまでの間に、各運動領域の学習に取り組みながら課題設定や課題解決の方法等の自己決定の範囲を少しずつ広げ、自己の能力や願いに応じて学習を調整してきた。器械運動系領域のマット運動や鉄棒運動では、けがへの不安や失敗に対する恐怖心から技に挑戦することに消極的な児童も見られた。また、運動技能の個人差が大きく、学級全体で共通の技に取り組む活動では、学習が停滞したり、困難さを感じたりする児童の姿が見られた。跳び箱運動では、第５学年で全員が基本的な切り返し系や回転系の技に取り組み、一部の児童は発展技にも挑戦している。自己の課題を見付け、仲間と協働的に課題解決を行う経験をしたが、課題発見や課題解決の方法の妥当性、ＩＣＴ機器の活用については、十分な力が身に付いたとは言えない。

そこで本単元では、ＩＣＴ機器や学習資料を活用して課題を発見し、取り組む技や練習の場などを自己決定し、適切な課題解決の方法を模索することで課題解決能力を高めていく。

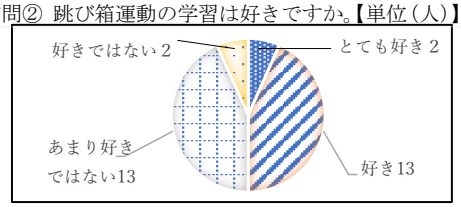
イ　実態調査及び考察

調査方法：質問紙調査　　調査対象：第６学年１組 30 人　　実施時期：令和７年 11 月５日

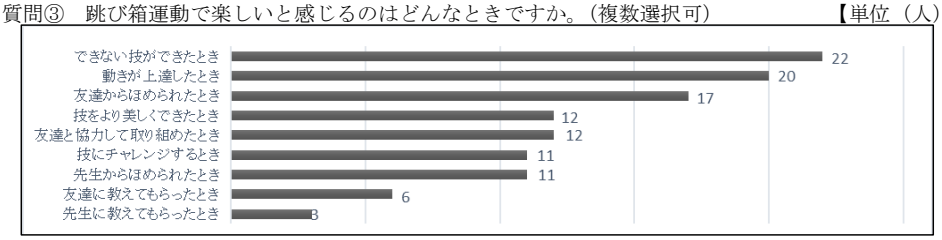
質問①　体育の学習は好きですか。【単位（人）】



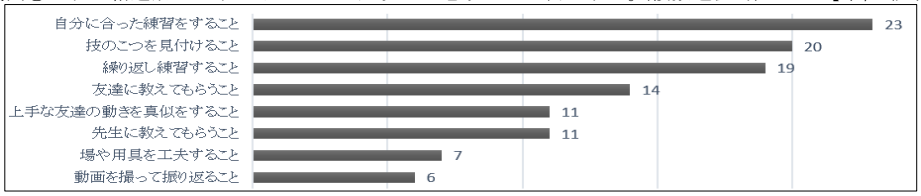
質問②　跳び箱運動の学習は好きですか。【単位（人）】



質問③　跳び箱運動で楽しいと感じるのはどんなときですか。（複数選択可）　　【単位（人）】



質問④　跳び箱運動で上手になるために大切だと思うことは何ですか。（複数選択可）　　【単位（人）】



コメントの追加 [昌杉1]: 質問①と質問②については、全て「好き」等の言葉と円グラフが示す場所とをつなげる矢印があるとよい。

ウ　考察

質問①の結果より、26人(87%)の児童が体育の学習に肯定的であることが分かった。一方、質問②の結果より、跳び箱運動の学習に意欲的な児童は15人(50%)で、体育学習に対する意欲と比べて低い割合であった。跳び箱運動の学習に肯定的ではない児童に理由を尋ねたところ、「苦手だから」、「落ちたら怖いから」といった意見がほとんどで、技能の向上が難しいことや心理的不安が意欲を下げる要因となっていることが明らかになった。

質問③の結果より、「できない技ができたとき」、「動きが上達したとき」に６割以上の児童が楽しさを感じており、技能の向上が楽しさにつながっていると考えられる。また、質問④の結果より、23人(77%)の児童が「自分に合った練習をすること」が大切だと回答しており、自分の課題に応じた練習を行うことの有効性を理解していると考えられる。一方で「動画を撮って振り返ること」と回答した児童は６人（20%）であり、ＩＣＴ機器を活用した学びの有効性を感じていない児童が多数を占めているという実態が分かった。

これらの結果を踏まえ、課題解決学習の充実のために、以下の３点を中心に授業を工夫し、児童が主体的に自己の学びを決定し、自らの力で学びを深められる体育学習を目指す。

① 技能の向上や成功体験を味わうことができるようにし、主体的な取組を促すこと。
② 一人一人が自分に合った練習を選択・決定できるようにすること。
③ ＩＣＴ機器の有効性に気付けるよう、課題の発見や解決に活用できるようにすること。

(3) 教材観

跳び箱運動は、「①助走、②踏切り、③第一空中局面、④着手、⑤第二空中局面、⑥着地」という一連の動作から成り立ち、全身を連動させて技能を高めることができる運動である。一方で、連動した動きゆえに課題発見が難しかったり、自分の運動感覚と実際の動きにずれが生まれやすかったりする。また、技能の個人差が大きく、全員で同じ技や課題に取り組むことが、運動が苦手な児童にとっては困難さに、運動が得意な児童にとっては物足りなさにつながりやすい。

本単元では、このような運動の特性と児童の実態を踏まえ、客観的に自分の動きを捉えて課題を発見したり、スモールステップで課題解決を図ったりすることを重視した。さらに、取り組む課題、練習の仕方、時間配分等を自己選択・自己決定できるようにすることで、一人一人が自分に合った学び方を実現できるよう学習を展開していく。

５　年間指導計画における位置付け(90 時間)　　※　網掛けは器械運動の領域

4月	5月	6月	7月	9月	10月
陸上運動④ (短距離走)	陸上運動④ (リレー)	水泳運動④ 体つくり運動② (体の動きを高める)	水泳運動⑥	陸上運動④ (走り高跳び)	器械運動④ (鉄棒運動)
体つくり運動② (体ほぐし)	ボール運動⑦ (ネット型)	体つくり運動② (体の動きを高める)	器械運動⑤ (マット運動)	体つくり運動④ (体の動きを高める)	表現運動④ (表現)

11月	12月	1月	2月	3月	
陸上運動④ (ハードル走)	ボール運動⑥ (ゴール型)	体つくり運動② (体の動きを高める)	ボール運動④ (ベースボール型)	ボール運動② (ベースボール型)	
器械運動④ (跳び箱運動)	器械運動③ (跳び箱運動) 本時	ボール運動⑤ (ネット型)	保健④ (病気の予防)		計 90
保健② (病気の予防)	保健② (病気の予防)				

６　単元の指導計画と評価計画（７時間扱い）

(1)　指導計画

時間	1	2	３～６（本時　第６時）	7
めあて	基本の技に取り組み､動きのポイントを体感しよう。	技を高めるための練習計画を考えよう。	目標や練習計画に沿って技を高めよう。	跳び箱発表会で技の高まりを認め合おう。
学習の流れ	１　整列・挨拶　２　場の準備　３　めあての確認　４　準備運動・感覚つくりの運動 ５　切り返し系の技の技能ポイントを確認する。 ６　切り返し系の技に取り組む。 ・　開脚跳び ・　大きな開脚跳び ７　回転系の技の技能ポイントを確認する。 ８　回転系の技に取り組む。 ・　台上前転 ９　場の片付け　10　整理運動　11　振り返り　12　挨拶	５　切り返し系の技に取り組む。 ・　跳び箱すごろくを活用した技の習得 ６　切り返し系の課題を共有する。 ・　運動感覚の共有 ７　回転系の技に取り組む。 ・　跳び箱すごろくを活用した技の習得 ８　回転系の技の課題を共有する。 ・　運動感覚の共有	５　課題解決タイム① ・　練習計画に沿った練習 ・　跳び箱すごろくを活用した技の習得(レベルアップ) 第３時：切り返し系 第４時：回転系 第５、６時：どちらかを選択 ６　共有タイム ・　よい学び方の共有 ７　課題解決タイム② ８　場の片付け　９　整理運動　10　振り返り　11　挨拶	５　発表リハーサル ６　跳び箱発表会(切り返し系) ７　跳び箱発表会 (切り返し系→回転系) ・　４つのグループに分かれたグループ内発表 ・　互いのよさや技の高まりを確認

(2)　評価計画

時間		1	2	3	4	5	6	7
評価規準（評価方法）	ア	①(観察･体育ノート)						②③（観察・動画）
	イ		①(観察･振り返りフォーム)			②(観察･体育ノート)	③(観察･体育ノート)	
	ウ	⑤（観察）	①（観察）	②（観察）	③（観察）	④（観察）		

7　指導に当たって

令和７年度　東京教師道場 体育・保健体育小２班　第３期テーマ
児童が自らの力で学びを深める体育学習～課題解決的な学習の充実を通して～

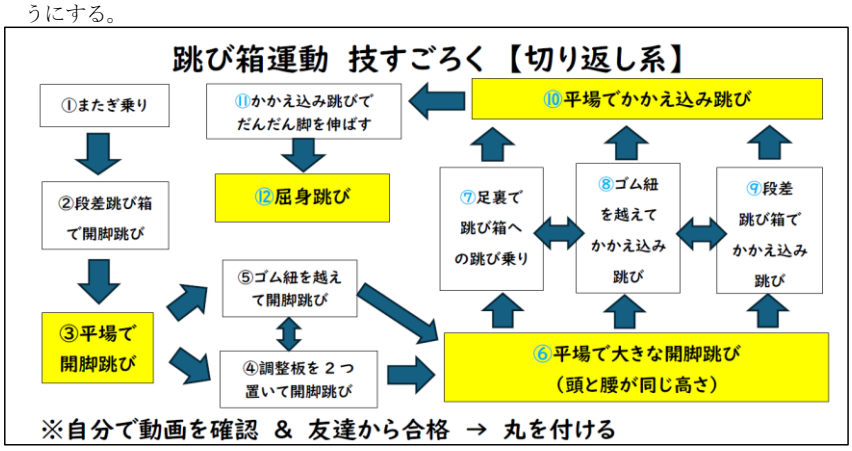
本単元では、班テーマに迫るため、児童の実態や跳び箱運動の特性に応じた手だてを工夫した。達成感の積み重ね、自己の能力や願いに応じた学び方の選択・決定の充実を通して、主体的に学ぶ姿を引き出すことを意図し、以下の手だてを行う。

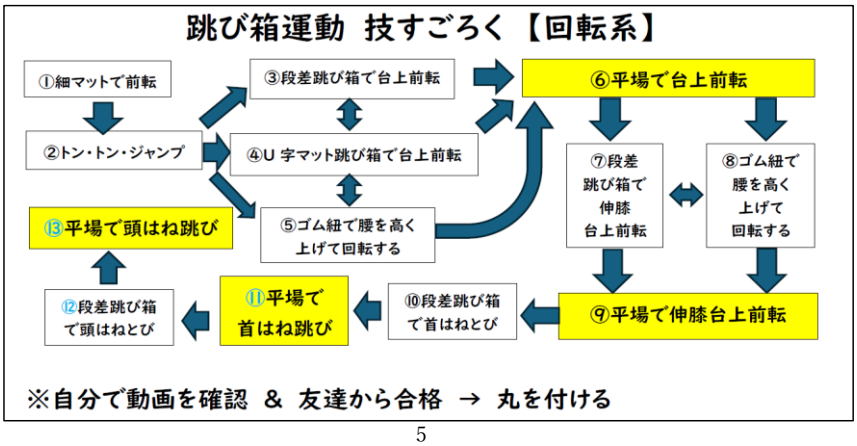
(1)　一人一人が達成感を味わい、意欲的に学習に取り組むための工夫

ア　スモールステップで示された技の段階表(跳び箱運動すごろく)

技の段階表を系統別に「跳び箱運動すごろく」として提示する。すごろくでは、基本技の前段階の動きや基本技と発展技の間をつなぐ動きも記載している。それにより、開脚跳びや台上前転といった基本技を習得できていない児童でも、自己の動きの高まりをスモールステップで確認することができ、技能が高まっていく達成感を味わうことができるようにする。また、いずれかの段階で技の習得が停滞してしまった場合にも、技ができるようになるまでの見通しをもつことで取り組むべき課題が明確になり、意欲的に活動できる。

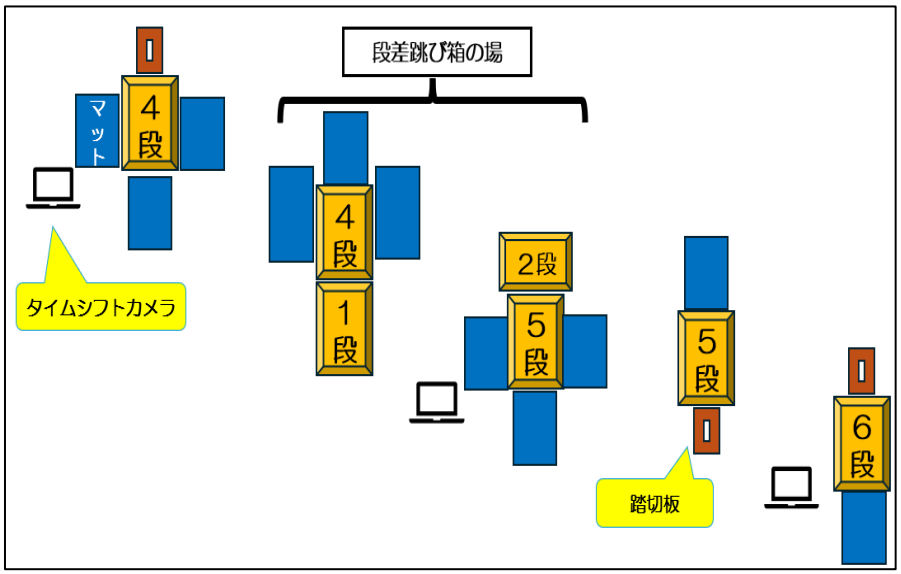
なお、基本技の習得が不十分なまま発展技に取り組むことがないように、すごろくを進める際には自分の動きを動画で確認するとともに、仲間からもできたと認められることを必要とする。その際、各技の技能ポイントを２つ程度に精選し、児童ができたかどうかを判断できるようにする。





イ　練習の場や用具の工夫・精選

跳び箱への恐怖感を軽減したり、課題に応じた練習を行ったりするために練習の場を工夫する。一方、数多くの場の設置や複雑な跳び箱の配置は準備に時間がかかり、児童の運動時間の減少や意欲の低下を招く。そのため、基本とする場は毎時間共通で下図の５か所とする。その上で、ゴム紐やロイター板、マット、調整器、ケンステップ、撮影用タブレットＰＣ等の用具を必要に応じて児童が使用し、練習の場を変えることができるようにする。それにより、児童の運動欲求を十分に満たすことと、自分に合った効果的な練習を行うことができるようにする。



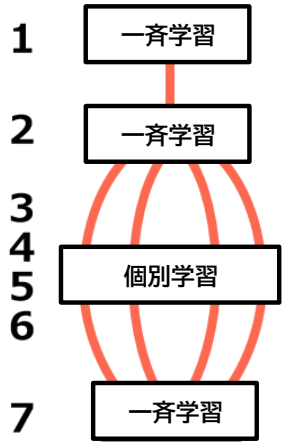
(2)　児童の自己選択・自己決定を促すための工夫

ア　単元デザインの工夫

本単元は、第１時と第２時を共通の学習課題による一斉学習、第３時～第６時を児童が自己選択・自己決定して課題解決学習を行う個別学習、第７時に終末の活動として跳び箱発表会(一斉学習)を行う単元計画とする。児童の自己選択・自己決定を促すためには、選択・決定するための知識が必要で、これらを身に付けていないと、練習計画を立てられなかったり、実態に合わない活動になったりする可能性がある。

また、児童が選択・決定する幅があまりに広すぎると、選択・決定はとても難しくなると考える。そこで、単元の前半で安全に関する内容や技の技能ポイントを一斉指導により習得・理解し、その後の個別学習において、適切に課題を発見したり、合理的な方法で課題解決を行ったりする。

個別学習の段階では、活動時間を弾力的に運用し、児童が自分の裁量で学び方を決定することができるようにする。具体的には、児童が以下の４つを自己選択・自己決定して練習計画を立て、その計画に基づいて課題解決学習を行っていく。



様々な自己決定

① 課題(開脚跳びで腰を高く上げる、首はね跳びではね動作のタイミングをつかむ　等)
② 相手(同じ課題の友達と一緒に行う、一人で黙々と行う　等)
③ 方法(動画を撮影する、先生に教えてもらう、たくさん繰り返す　等)
④ 時間(各練習に取り組む時間配分)

イ　ＩＣＴ機器の活用

手本動画や技のポイント、技の段階表を一元的に確認できる「跳び箱アプリ」を活用し、必要に応じて児童がいつでも情報を取り出せるようにする。また、タイムシフトカメラ(遅延再生動画)を設置し自分の動きを確認し、技のポイント等の学習資料と比べられるようにする。これらのＩＣＴ機器を自己選択・自己決定を行うために活用することで、児童が根拠をもって自らの力で学習を深めていけるようにする。

「跳び箱運動アプリ」

武蔵野市教育研究会　小学校体育部作成

ウ　課題や活動内容の可視化

自己選択・自己決定して課題解決学習を行う個別学習では、指導者が一人一人の課題や活動内容を把握しにくく、指導者が適切な言葉掛けや支援を行うこと、児童同士が課題に応じたアドバイスを行うことが難しくなる。そこで、本単元では以下に示すような方法で児童の課題や活動内容を可視化する。それにより、指導者や仲間が課題に応じた適切な関わりを行えるようにする。

可視化の方法

①　練習計画を一覧にして掲示し、全員の練習計画を可視化する。
②　「跳び箱運動すごろく」のマスにネームプレートを貼り、技の習得状況を可視化する。
③　技の習得を目指す場合は赤帽子、技のできばえの向上を目指す場合は白帽子で活動し、同じ技や活動に取り組む場合でも、その目的を可視化する。

エ　児童の学習状況の想定

本単元では、児童が自分で立てた練習計画に基づいて課題解決を行うことが活動の中心となる。従って、教師は児童が活動する姿から学習状況を見取り、適切な言葉掛けを行う必要がある。前述の可視化により活動内容を把握した上で児童の姿から課題を把握し、それに応じた言葉掛けを行う。一人一人が異なる技に挑戦している中で学習状況を瞬時に判断し言葉を掛けることは容易ではなく、事前に児童の学習状況とそれに応じた教師行動を想定しておく必要性がある。そこで以下の通り、技ごとに児童の姿やそれに応じた教師行動を想定した。

技	伸膝台上前転	首はね跳び	大きな開脚跳び	かかえ込み跳び
○ 予想される児童の姿 ● 児童への支援例	○ 伸膝台上前転を安定して行うことができる。 ● 首はね跳びや頭跳ね跳びに挑戦するように助言する。 ○ 膝が曲がって大きく回転できない。 ● 段差跳び箱で大きな回転を行うよう助言する。 ● ゴム紐を跳び箱の上に設置し、足が当たるように回るよう助言する。 ○ 頭頂部を跳び箱についてしまい、安定して回転できない。 ● 動画で頭のどの部分がついているかを確認しながら台上前転を行うように助言する。 ● マットの場で後頭部をつける前転を練習するように助言する。	○ 首はね跳びを安定して行うことができる。 ● 頭はねとびに挑戦するように助言する。 ● 調節器で第一空中局面を大きくし、より雄大になるように助言する。 ○ 跳び箱上で「くの字」のためをつくることができない。 ● ステージ上からはね動作で下り、「くの字」から腰を開いて勢いをつける感覚づくりを行うよう助言する。 ○ タイミングよくはね動作ができない。 ● 動画ではね動作のタイミングを確認するように助言する。 ● マットや段差跳び箱で首はね起きや首はね跳びを練習し、「はね動作」の動きとタイミングを習得させる。	○ 大きな開脚跳びを安定して行うことができる。 ● かかえ込み跳びに挑戦するように助言する。 ○ 腰を高く上げられない。 ● 調整器を使い、踏切り板と跳び箱の間隔を広げ、第一空中局面を大きくする。 ● 動画で頭と腰の位置関係を確認し、頭と腰が平行になるまで腰を上げるように助言する。 ○ 体を切り替えられず、着地で止まれない。 ● 着手の際、手で体を支え、強く突き放すように助言する。 ● 体を起こして着地するため、着地時に前を向くように助言する。	○ かかえ込み跳びを安定して行うことができる。 ● 着地でピタッと止まれるように腕の突き放しを強くしたり、着地時に正面を向いたりするように助言する。 ● 少しずつ膝を伸ばし、より美しく雄大に技を行えるように助言する。 ○ 腰を高く上げられない。 ● 調整器を使用し、腰を高く上げやすくなるように場を調整する。 ● 踏切り後に腰を上げてゴム紐を越える練習の場で練習するように助言する。 ○ 腕の突き放しが弱く、跳び箱を越えられない。 ● 大きな開脚跳びの段階に戻って腕の突き放しを意識させる。
	○ 自分の体の動きをイメージできず、課題を発見できない。 ● 一緒にタイムシフトカメラを確認し、技能ポイントと比較するように助言する。 ○ 基本の技の習得が不十分な状態で発展技に取り組もうとする。 ● 「跳び箱アプリ」の技の習得段階表や「跳び箱運動すごろく」を使って、スモールステップで課題を解決していくように助言する。			

コメントの追加 [昌杉2]: 表の中は修正できないので、ここでコメントします。
○ 伸膝台上前転を安定して行
うことができる。
という書き方にしすることはできますか。○や●の次は一文字分スペースを空けるという表記にしてください。
頭頂部や頭が「つく」は、「付く」or「着く」or「つく」のどれですかね。解説には「つく」が使われていましたが、手をつくときは「着手」ですよね。
踏切板　→　踏切り板

8　本時（全７時間中の第６時）

(1)　本時の目標

課題解決のために自己や仲間が考えたことを他者に伝えることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

(2)　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	○　指導上の留意点・配慮事項	評価規準 (評価方法)
導入 12 分	1　整列・挨拶 2　場の準備 3　めあての確認 目標や計画に沿って技を高めよう。 ～さらにレベルアップするために練習の行い方を工夫しよう～ 4　準備運動・感覚つくりの運動 壁ドンジャンプ、うさぎ跳び、 細マット前転、トントン腰上げ	○　めあて、学習の流れ、本時の内容を視覚的に確かめられる掲示物を活用する。 ○　場の安全に気を付けて準備できるよう言葉掛けをする。 ○　反復練習だけでなく、他者や学習資料、ＩＣＴ機器を活用して、練習の質を高める必要があること、そのために自分の課題や身体感覚に合う練習を選択することを確認する。 ○　よく使う部位を意識しながら準備運動に取り組むよう言葉掛けをする。 ○　腕支持感覚、逆さ感覚などを養うことができる運動を取り上げる。	
展開 25 分	5　課題解決タイム① ・　あらかじめ立てた練習計画に沿って活動を行う。 ・　切り返し系、回転系のどちらかに取り組む。 6　共有タイム ・　よい学び方について共有する。 7　課題解決タイム② ・　引き続き計画に沿って活動を行う。 ・　必要に応じて課題や練習方法の見直しを行う。	○　予想される児童の姿と支援例を基に、技の上達が見られない児童を中心に言葉を掛けて課題の解決を支援する。 ○　仲間の動きを見てアドバイスしている児童を称賛し、全体に広める。 ○　動画で動きを確認し、技能ポイントを確認している児童を称賛し、全体に広める。 ○　仲間の力やＩＣＴ機器を活用したりすることのよさを伝える。 ○　自分の運動した感覚と実際の動きにずれがあることを再認識し、反復練習だけを行うことの限界に気付くようにする。 ○　共有タイムで確認したよい学び方を行っている児童を称賛する。 ○　動きの向上を具体的に価値付け、小さな練習の成果に気付けるようにする。	イ―③ (観察)
まとめ 8 分	8　場の片付け 9　整理運動 10　振り返り ・　技の高まりを認め合う。 ・　よい学び方を認め合う。 11　挨拶	○　安全に気を付けて準備した場を片付けるように言葉掛けをする。 ○　心と体を落ち着かせて整理運動ができるように、落ち着いた曲調の音楽を流す。 ○　本時の練習の成果に気付きやすくするために、できばえの向上や運動感覚の変化も技能の高まりであることを伝える。 ○　学び方を共有し、仲間やＩＣＴ機器を取り入れることのよさに気付けるようにする。	イ―③ (体育ノート)

(3)　授業観察の視点

○　一人一人が達成感を味わい、意欲的に学習に取り組むための工夫は有効だったか。

○　児童の自己選択・自己決定を促すための工夫は有効だったか。

※　参考文献　「小学校学習指導要領解説　体育編」文部科学省（平成 29 年）
「学校体育実技資料 第 10 集 器械運動指導の手引き」（平成 27 年）
『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（令和２年）

東京教師道場（２年次）　　体育・保健体育　小学校２班

研修の概要

１　東京教師道場について

５名の部員と１名のリーダーと担当教授からなる班で、主に授業観察と協議からなる授業研究を行う２年間の研修である。

<table>
<tr><td rowspan="2">１年次</td><td colspan="3">第１期　把握・点検期</td><td colspan="2"></td><td>第２期　発展・充実期</td></tr>
<tr><td>第１回
授業研究</td><td>第２回
授業研究</td><td>第３・４回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第５～10 回
授業研究</td></tr>
<tr><td></td><td>教職員研修
センター</td><td>リーダーの
所属校</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td></tr>
<tr><td rowspan="3">２年次</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td><td colspan="4">第３期　自立・完成期</td></tr>
<tr><td>第 11 回
授業研究</td><td>第 12～14 回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第 15～19 回
授業研究</td><td>第 20 回授業研究</td></tr>
<tr><td>教職員研修
センター</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td><td>教職員研修
センター</td></tr>
</table>

・　２年間で３回、学校種を越えた授業研究を実施した。

・　夏季休業期間には、夏季集中協議として、実技研修や授業力の自己診断に基づく協議、教材や実践事例の紹介等を行った。

２　班での取組及び班テーマについて

<table>
<tr><td>第１期

把握・
点検期</td><td>第１期は班テーマを設定しなかったが、リーダーの模範授業や授業研究を通して、班としてどのような授業を目指していくのかを考えた。それと同時に「授業力自己診断シート」等を活用して自己の授業力についての課題を把握した。夏季集中協議では、実技研修を通して運動領域ごとに技能ポイントや指導法等の知見を深めた。また、「授業力の６要素」を踏まえた上で部員同士の課題を共有し、班テーマにつながる協議を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２期

発展・
充実期</td><td>班テーマ　「『できた』を実感し、『もっとやりたい』と思える体育学習」</td></tr>
<tr><td>第１期の授業研究を重ねる中で、課題解決型の学習を通して一定の目標を全ての児童が達成する(＝できる)ことを目指したいという思いをもった。「できた」を十分に味わわせることで、児童が主体的に学習課題を把握し、解決することができるようになる。さらに、こうした学習のサイクルが体育や運動を「楽しい」、「もっとやりたい」と感じる要因になるという仮説を立てた。これらの経験の積み重ねが、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために必要な資質・能力の育成に結び付くと考え、第２期の班テーマを設定した。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第３期

自立・
完成期</td><td>班テーマ　「児童が自らの力で学びを深める体育学習
～課題解決的な学習の充実を通して～」</td></tr>
<tr><td>第２期の成果として、指導の重点化や指導方法・教材の工夫等により児童に「できた」を実感させる授業づくりができたことが挙げられる。しかし、知識の習得や技能の向上に指導が偏り、児童が自ら課題を解決する楽しさや、「できた」という楽しさ以外の学習の面白さを十分に味わうことができない児童も見られた。
そこで第３期は、知識の習得や技能の向上を図るだけではなく、自己評価や他者評価を取り入れながら課題を解決する学習過程を通して、思考力・判断力・表現力等を高め、自ら学びを深めていく児童の育成を図りたいと考え、第３期の班テーマを設定した。</td></tr>
</table>

３　成果と課題

(1)　成果

- 各運動領域の学びが何であるのかについて、学習指導要領や文部科学省等の資料を根拠にして考えるようになった。
- 児童観や教材観を基に各単元で身に付けさせたい力を明確にし、それに応じた指導計画を考えられるようになった。
- ＩＣＴ機器の活用の場面を多く設けたことにより、児童の学習状況を指導者がより把握できるようになった。それにより、言葉掛けや学習形態等の授業改善につなげることができた。
- 運動の特性を児童が味わえることを重視した学習を継続的に実施することにより、体育の学習に対して肯定的な児童が増加した。
- 意図的なグループ・チーム編成、仲間と互いに運動を見合うための環境や言葉掛けの工夫等の協働的な学習を促す手だてを講じることで、仲間と共に課題解決を行う学び方が児童に定着した。
- スモールステップで課題を設定したり、自分に合う課題解決方法を選択したりすることを通して、「できた」を実感する児童が増加し、児童の学習意欲の向上が見られた。
- ＩＣＴ機器を活用することで、自分やチームの運動の状況を客観的に把握し、実態に即した課題を発見することができる児童が増加した。

(2)　課題

- 児童が必要感をもって主体的にＩＣＴ機器を活用できるようにする。
- 児童の自己決定や試行錯誤の過程など、学び方をより適切に評価する手法を取り入れる。
- 課題解決学習の充実のために、学習の見通しをもって学習計画を立てたり、前時の振り返りを次時に生かしたりするなど、児童が自ら学びを調整できるようにする。
- 教師が教えることと児童が気付くこと、教師が決めることと児童が選択・決定することの線引きを児童の実態や指導者の願いに応じて意図的・計画的に行い、児童の課題解決能力を向上させていく。